
Love me, Kitty!!

りほ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Love me , Kitty ! !

【Nコード】

N4822Q

【作者名】

りほ

【あらすじ】

エンヴォナローラ家は代々マフィアの家柄。跡取り息子として英才教育を受けたトトは出世街道驀進中だったが、代替わりした若いボスの不興をかって14歳ながら謹慎中の身となった。腐っても鯛？バカヤロー、腐ったもんはきちんと捨てる！そんなトトがなければの博愛精神で拾った子供をなんとかかんとか育てていく話です。

架空の国の話です。

恋愛色は最初のうち（ヒロインが幼いうち）はほぼ無です。

少年漫画程度の残虐シーン・残虐を好む人間は予告なく出てきま

す。お気をつけください。

1・What is this?

どこもかしこも埃と汗と泥のにおいばかりで俺は正直あんまり気分がよくなかったがしかたない。瓦礫とごみの山を踏み越え足早に歩いて目当ての情報屋のドアを叩く。

中から出てきた男は俺を見るなりにつこりと笑った。「はい、写真」そして挨拶のようにぐりぐり俺の頭をかいぐるので一発殴って封筒を押しつける。

「約束の100シュテルだ」

「なんだい、シュテルって。俺はランゲで欲しかったんだけどなあ坊」

「その呼び方やめろ。ランゲで20万だ、十分だろ」

アメデーオは頬を撫でながら「そりゃありがたい」と言って一度中にひっこんだ。俺も律儀に彼が出てくるのを待つ。出てきたときには薄汚いコーヒーカップに並々と茶色い液体を注いだものを二つ手に持っていた。

「飲みな。ここまで大変だっただろう」

「んなわけねえだろ、俺がこんなスラムでなにが大変だって言うんだ」

「坊は優しいからさ、ほら、行き倒れてる連中のこと、放っておけなかったり」

「アホかお前はマフィアがそんな慈善活動するわけねえだろが」

「はっは、まあそれは冗談として。最近このへんに上手いスリがあるんだよ。特にこのあたりを抜け道に使う街の連中がよく被害にあつてね」

コーヒーとは思えないほど薄い味の飲み物をちびちび喉に流し込みながらアメデオの話聞き流す。

凄腕の情報屋としてマフィアに名を轟かせてるくせに、どうしてアメデオがいつまでもこんなトコロでぼろ屋に住み続けているのかさっぱり分らない。トタンの屋根は今にも飛んではがれそうだし、このコーヒーカップだって元は白かったんだろくにその方は茶色く変色してる　つかどこで拾ったんだこれ？

「マフィアの人たちも何人かスラれてるよ」

「雑魚だな。お前は犯人知ってんだろ、すばしっこいのか？」

「売ってないだけ。この子だしね」

ふん、と鼻を鳴らしてコーヒーもどきを飲み干すと、そのカップを返してアメデオに背を向ける。

「じゃあな、坊」

「坊じゃねえ！」

アメデオは甘い。下っ端とはいえマフィアが被害に遭ってるならそのスリはすぐ殺されるだろう。

舗装どころか瓦礫も取り除かれていない、道とも言えないような道を下る。

この辺は低所得なんてもんじゃない、無所得のヤツらばかりが住んでる、エメリア共和国の中でも1、2をあらそう巨大スラム街だ。灰色の街並みと風にはためく褪せた色の服、それに炊き出しの白い煙が全ての集落。

こんなところ、アメデーオがいなけりや来るもか。うちのところはファミリー拡大のために孤児を攫ってくるほど困窮してないし、俺の家は3代前からマフィアだ。スラムとは本当に関係がない。

ざくざく砂利を踏んで歩いていると、俺の服に目をつけて物乞いどもがわらわらと寄ってきた。汚い服と顔。すぐりついてくる手をふり払いながら進む。これだからスラムは嫌いだ、人間から尊厳まで奪い取っていきやがる。

ボスの機嫌をそこねて謹慎処分をくらってからすでに5ヶ月。俺たちは暇を持て余している。

どうでもいい連中さえ殺せなくなってヒステリーばかり起こしてうるさい奴や、未練がましくボスに謝りにいつちや追い帰されていじけている奴や、将来を悲観して自殺の計画を立てることを趣味に始めた奴や、あーまったくななんだあいつらは！？本当に面倒くさい連中だな！静かなのは金儲けでフーベルに飛んでるルーカだけじゃねえか！

イライラして足元に転がっていた石を蹴っ飛ばすと見事に目の前にいた男の肩にぶつかって男はぼったり倒れた。あーあ。死んだか。興味もないのでそのまま身体をまたいで進んだが、その男の屍（仮）を超えたところどころ白髪も抜け落ちた老人の手が右からブーツにすがりついてきたのでそれを蹴りとばして退ける。

あーウゼエ。ため息ついてさっさと帰ろうと思ったところで左半身に違和感を感じた。

反射的に手をひるがえして身体の横をすりぬけようとしたモノをつかむ。「！」掴んだモノは予想外に細くてそのまま抜けられてしまふかと思ひそれをねじりあげるようにして引き寄せた。

小さい。

「——ああ、おまえかスリッてのは」

髪が顔を覆っていて見分けがつかないが、とにかく子供だった。掴みあげた手にはしっかりと財布が握られている、俺のものだ。群がっていた乞食どもがなにかぶつぶつ言いながら（「おお神よ！」）波のように引き上げていく。

「てめえ分かってんだろ？ マフィアに手え出したら消されるんだぜ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「何とか言ったらどうだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「おいガキィ！」

ぐいと力をこめるとボキリと音がしたおいマジかよそんな強く握ってねえぞ。

泣かれるかと身構えたが、ガキはあいかわらず黙ったまま何も言わない。折れた手から落ちた財布を拾ってもう一度手元に戻す。

上を向いたガキの腕は鶏の脚のように細い。腕を折られれば大人だつて呻くぐらいはするもんだが、このガキは何も言わない。大したもんだ、と思った。

「おまえ、家は」

だんまり。

「今までに盗んだ金はどこだ？」

だんまり。

「何も言わねえならここで叩つ殺すぞ！」

それでも無言。

折れた腕で吊るされているような状態でもガキはじっとしている。がさがさに荒れた肌は子供のもんじゃない。端切れを結んだだけの服ともいえない布を被ったこのガキはスラムの中でも最低ランクの様相だ。

ぼさぼさの黒い髪をかき分けようとしたがあんまりに絡まりすぎて苦労した。ようやく邪魔な髪をどけてガキの顔をさらてみると、ぐりぐりした黒い目はいたって静かで顔も痛み歪んでるなんてことはなかった。

「痛くねえのか？」

返事はないだろうと思いつつも訊いてみる。掴んだ手に力を入れてみたが、ガキの表情はちらとも動かなかった。

「親、いんのか」

ガキはきよとした顔のまま首をかしげる。

にらみ合ったまま丸々3分。きゅうう、と気の抜けた音がした。

「・・・・・・・・・・来い」

What are you doing?

意図せずとは言え俺が折ってしまったのに変わりはないので、ガキの左腕にはそこらへんに落ちていた枝きれを添えて、やはりそこらへんに落ちていた布きれで縛り上げる。

ガキはじつとその様子を見ているだけでやっぱり何も言わない。俺の腰までもないちっぽけな子供。おそらく就学前の年頃だろう。ちっ、めんどくせえもん拾っちまった。

俺がこれくらい歳のころはもつとうるさかったはずだし、従弟なんかは全く、口を縫い合わせてやりたいくらいベラベラしゃべりたてる。

小さい生き物つてのはもつと騒ぎ立てるもんじゃないのか、犬でも猫でも？怯えてるわけでもないのに静かなガキなんて気色悪い。

ガキは短い脚を懸命に動かしてついてくる。

スラム街を出て少し歩くと、小さいながら一応鉄道も通っている町がある。

細々とオリブや小麦を作っている村が寄り集まってできたようなところであるから見るべきものは広大な畑くらいのもので、今はまだ見渡すかぎりむきだしの土しかない。

上等にも転ばずについてきたガキは、それでも吐瀉物と排泄物を混ぜ合わせたみたいないかにも浮浪者というひどい臭いを漂わせていた。そんなのをいつまでも連れ歩くんなんて冗談じゃない。俺は迷わず農業の片手間に営んでいるとしか思えないこの町唯一のぼろホテルに入った。

交通の関係でスラムにやってくるマフィア連中は必ずこの町を通ることになる。奴らの落としていく金で設けているのだろう、ホテルの経営者は妖怪みたいな身なりのガキをつれた俺が部屋を要求して

きても不思議そうな顔一つせず鍵をよこした。

女か。

俺が2人も入ればぎりぎりになりそうな狭いシャワールームに放り込んで服をはぎとってやっとわかった。

骨の形がよくわかる手足とあばらの浮いた胸、ふくらみかけた腹は触れると不自然にかく、ガスがたまっているのだと知れる。典型的な飢餓状態だった。

そこから視線を下げて俺は顔をしかめた。太くない太ももに銃創がある。44口径のピストル。

他にないかと見てみたが、裸足の足が凍傷と裂傷の温床になっているだけだった。触れてみても反応しないし、ためしに指をつっこんでみてもぼーっと立ったままにいる。

痛みに鈍感なのか？

そう思ってシャワーノズルをひねった、その瞬間、ガキが動いて鼻をひっぱたかれた。

「っ！」

なんだこいついままでおとなしかったくせに！

痛かないが全く抵抗を予想していなかったから手を離しちまって逃げられかけた。

「動くんじゃねえ！つてめ、暴れんな！」

スリをしていただけあってガキは敏捷で、無理やり押さえつけたと

きには俺までぬれねずみになっていた。最悪だ。ガキを抱えたまま廊下に出て服と包帯を買ってくるよう命令すると経営者がイグアナでも見たような顔をしたので殴ってやるうかと思った。実際には両手とも忌々しいガキによってふさがれていたからめいっばい殺気をこめて睨むだけにとどまったが（それでも男は飛ぶように姿を消した）。

「じつとしてろよ」

最初はがたがた震えていたガキも少しするとおとなしくなった。足の間小さな身体をはさんで頭から洗っていく。

当然のごとく細い髪は痛んでいて、梳こうにも絡まったり切れたり抜けたり、ええい面倒くさい！女とはいえガキならいいだろ！ベルトからナイフを取り出して思い切ってもじやもじやの根元のほうで切り落とした。それでようやくガキの顔を拝めた。

泥で汚れていたから肌の色で分からなかった。現れたのはぐりぐりした目と小さな口。俺は顎をひいた。

なんでエメリアのスラムにオサカベのガキがいるんだ？

オサカベは南の大陸で、大小いくつもの国に分かれている。それぞれ言葉も違えば国民の気性も違うが、共通しているのは北の大陸の人間に比べて肌の色が濃いことと背が低いことだ。

しかしオサカベからエメリアまで来ようと思ったら海を渡ったうえであと6つほど国を縦断しなけりやならない。遠いところの話じゃない、飛行機でも一日はかかる。

「おまえどこから来たんだ？」

ガキはきょとんと見上げるだけで口を開こうとしない。言葉が通じ

ないのかと思つていくつかオサカベの言語で話しかけてみたがやっぱりダメだった。俺だってオサカベの国すべての言葉を知っているわけじゃない。諦めて臭い落としに専念することにした。シャンプーがなかったから石鹸で髪も洗ったが、いくら使ってもちつとも泡立たないところにガキの不衛生さを感じた。

濡れたついでに俺も汗を流してホテルの男が買ってきた服に袖を通す。子供服がなかったのか気が利かなかったのか2枚とも大人用だったからガキにはTシャツのほうを着せた。

右腕をとって今度はちゃんと包帯を巻いてやると、子供は興味深そうにそこをひつかいてみたりめくろうとしてみたり、何が面白いのかさっぱりわからない1人遊びに興じ始める。ベッドにほうつて窓を開けた。

夏が終わつてようやく雨が降り出した。

しかしまだ地面は乾燥していて、そこに降るもんだから空気はじめつぽくなるわ中途半端に温い風がふくわ、この時期の外出は気が重い。しかも今日は余計なものまで拾っちゃった。

窓枠に頬杖をついたその目の前をオリーブ山盛りのトラックが横切る。右手の丘陵地帯から運んできた今年最後の収穫だろう。山積みはまだ青い実。

そういえば洗淨にかまけて忘れていたが、ガキの腹がなったからここまで連れてきたんじゃないかなかったか？

「おいガキ、乾いたらどつかの店に……うおおおい！」

アホかあ！振り返るとガキは自分の折れた右腕を左手で掴んで力の

限りひっぱっていたアホかあ！！治るもんも治らねえじゃねえか！！
あわてて左手を引き離すとガキはやっぱりきょとんと見上げてきた。
脱力。

「……おまえよく今まで生きてこられたな……」

ほどけた包帯を巻きなおしてやりながらため息がもれる。
痛覚が人間の本能にくみこまれている理由を実感する瞬間だ。

「、あ？」

ふと視線を落とすと洗濯のしすぎでしなびたシーツの上に点々と血痕が付着していた。ガキの足を持ち上げてみるとさつき無理やりこじあけた傷口がぱっくり裂けている。

「おいおい……」

俺はげんなりした。

面倒くせえ。

What makes you cry?

当然ながら子供用の靴なんてものもなかったし、今まで大丈夫だったんだからこれからも大丈夫だろうと都合よく解釈して、足にはきつめに包帯を巻いただけでそのまま歩かせた。

ホテルを出てとりあえず駅のほうへ向かう。そのあたりに商店街があったはずだ。

ガキは目にするものすべてが珍しいのか、あっちへふらふらこつちへふらふら落着きがなく、ガラス片でも踏みつけたらまた面倒だと思っただけに手をひいてそばに戻さなくちゃならなかった。小さい手。

そっぴゃうさつきこの手が俺の財布をかつぱらっというところだ。と思うと複雑な気持ちになった。なんでこんなところで慈善活動なんかしてるんだ。捨てていいこうか。

だがそのときガキがふらふら向かっていったのがパン屋だったので機会を逃した。

「ちっ」

仕方なく後を追ってガキが開いてる左手でべちべち叩いているドアを開けてやる。

とっくに昼時は過ぎていて、店の中には退屈そうな顔をした売り子しかいなかった。俺の顔を見たたんものすごい笑顔になったが、アメデオの所へ行く前にもう昼食はとり終えていたから俺はクロワッサンを2つだけ買うにとどめた。

ありがとうございましたー、とそれでも嬉しそうな売り子の声を締め出すようにドアを閉める。女っつのはまったく…

片方のパンをガキに与えてそのへんにいくらでも広がっている畦の一角に腰を下ろす。真似をしてガキもよじ登ろうとするが、右腕をつっている上にパンを握っているのだからなかなか上手くいかない。しばらくほうつておいたが視界の端でちよろちよろうるさいので手を出した。

「ほらよ」

襟首掴んでひきあげてやる。腰を落ち着けるとガキは足をぷらぷらゆすりながらパンをこねくり回し始めた。

それを横目にパンをかするとオリブオイルの味が口の中に広がった。まあまあだな。もう一口かじって振り返るとガキがまじまじと俺の口元を凝視していた。

俺と目が合うとやはり真似てか大きく口を開けてあむりとパンを口に押し込んだ。

もしこれが、スリをしていたのが、男だったなら迷わず半殺しにしていただろうし女だったとしても張り倒すくらいはしただろう。俺は例えばボスやルーカなんかに比べりゃ物欲も執着心も薄いほうだが、自分のものを故意に奪取されるのは我慢ならない。

手足の手当てをしてやりパンまで買い与えてやったのは、これが子供で、しかも傷を負うことに無感動であるという点に興味を覚えたからだった。

だからガキが泣きだしたことで俺は大いに狼狽した。

「おい……………」

ガキが瞬きするたびにぼろぼろ涙が落ちていく。なのに肝心のガキ自身は苦悶の表情を浮かべるでもなく哀惜の色を見せるでもなく黙々とパンをかじり続けているのだ。

心底気持ち悪い。

俺は顔をしかめた。

このガキがどんな状態にあらうがこれ以上ここに俺がいる必要はない。言葉も通じないスラムのガキを拾って面倒見てやらなきゃいけない理由なんてないだろう。腹を満たしてやつただけで充分だ。

このガキ天性の女優なのかもしれねえし。

もう帰ってしまおうか。そう思うのになぜか脚が動かない。

「おい」

もう一度強く呼んでも無視された。

イラッとして親指で近いほうの頬を乱暴にぬぐうとようやくきょとんと見上げられる。ぬぐったそばからまた涙があふれてくるのできりがない。

黒い目と透明な水。

気づいてないのか、と分かった。自分に与えられた痛みにも、自分が泣いていることにもこのガキは気づいていないのだ。だから麻酔も打たれていない右腕を抱えてぼろぼろ泣きながらパンをかじるなんてことができるのだ。

ガキがパンを食べようと口を開くとそのたびにあふれた涙が体内へと侵入する。ガキはそのままパンをかじる。ぶらぶら揺れる小さな足。

脚がやっと動いた。

What is your name? (前書き)

犯罪はダメ絶対!

What is your name?

「ないよ」

あつさり言い放った奴に俺は眉をひそめた。

「んなわけねえだろ」

「それが事実なんだよねえ残念ながら」

20分前、ガキを文字通りぶら下げて戻ってきた俺を見てアメデー
オは爆笑した。5歳の頃アメデーオにもらった誕生日プレゼントが
古典的なビックリ箱で開けたとたん衝撃のあまりまっぴたつに引き
ちぎった時と同じ笑い方だった。今回はその時以上に本気で殺意が
わいた。鳩尾に一発キメるだけでおさめた俺の理性を讃えてやりた
い。

スラれたマフィアが依頼していったガキの情報をまとめた書類（未
売却）をめくりながら、間違いないよ、とアメデーオはもう一度言
った。

「その子に名前はないね」

俺は、家というより掘立小屋の中でむきだしの地面をならしただけ
の床に座り込み自分の右手をいじくっているガキを見る。

適当に切ってしまったがどうやら天然パーマらしいくしゃくしゃの
髪と、それが覆っている小さな丸い頭と短くがりがりの手足。「当
然ながら戸籍も出生登録もないね」それは予想していた。

「ここで暮らしてたなら誰かしらこいつの面倒をみてたはずだろ。」

こんなガキが一人で生きてけるかよ」

「それがこの子2年くらい前にふらつと住みついた子でさ。最初のうちは僕も気にかけてただけでなんだか自活してるっぽいし別に大丈夫かなと。だってたぶんこの辺では僕の次に稼ぎ多かったろうし」

「おまえはなんて呼んでたんだ」

「いやー、呼ばないでも寄ってきたから呼ぶ必要がなかったというか、あははー」

「なんでだよ……」

ため息がもれた。親父と懇意にしているこいつとの付き合いはそれなりに長いのだが、あいかわらず考え方が理解できない。殺すなど念を押すほどかわいがっているガキに名前の一つもつけてやんねえのか。

ガキはいくら触れても反応しない右腕に飽きたのか今度は足の包帯をいじり始めた。

「坊がつけてやってよ」

「オサカベの名前のつけ方なんて知らねえよ」

「正確に言っとヒサメの子だね」

ヒサメはオサカベの中でも最も小さな国で、最も技術力のある国だ。食料は完全輸入制、農業を放棄して工業国として名を馳せている。

「戸籍はないんじゃないかったのか？」

「僕を誰だと思っているんだい？地道に辿ったんだよ、売人ルート。まだ生後間もない時期にヒサメからチェン、タイロー、ブラシユカ口を通してエメリアへ」

「……スプロファミリーだな」

「坊は力任せじゃないから好きだよ」

スペロは中の上程度の規模で、このあたりに根を下ろしていたそこそ羽振りのよいファミリーだ。このスラムはスペロの根拠地だった街に付随していたもので、ファミリーが2年前にうちに吸収されて街が廃れ、さつきシャワーを浴びパンを食ったあの小さな町だけが農業に依存していたおかげで残ったあとも、ここには行き場のないやつらがみついている。

スペロのようにここ百年の間に軍の力を利用してのしあがってきたファミリーは少なからず自警団的な性格を脱しているから、裏で人身売買に手を出していたとしてもおかしくはないが。

「わざわざヒサメから持ってくるか普通」

「最初はまあ妥当な値段だったけど、最後は500万ランゲで買われているね」

「500万!？」

絶世の美女ならともかく手間のかかる赤ん坊に500万は多すぎる。4人家族が10年生きていける額だ。

「もちろんチェンからも何十と送られてきてるよ。ただヒサメで調達できたのはこの子だけみたいだ。さすが先進国。あとは途上国の子供が多いかな。ただ値段はだいたいどこの子も同じだね。買った子を転売もしてない」

「スペロはなにやってた」

「さあ、そこまでは。チェスカトロに吸収されて情報は全部そっちに持って行かれたから、坊のほう詳しいんじゃない?——ああ、謹慎中だっけ、ごめんね」

「もう一発喰らいてえのかてめえは?」

「いやだな余裕を持たないと女の子に嫌われちゃうよ。このデータ

だって国中の人身売買の仲介人を虱潰しにして作ったんだから。お金くれるならもつと調べてあげるけど」

「……………いや、いい」

苦虫50匹をまとめてかみつぶしたようになってると自分でもわかる俺の顔を楽しそうに眺めまわしてから、アメデオは「こつちおいで」とガキを手招き自分の膝に抱きあげる。

「坊もいいことするじゃないか。洗ってあげるなんて」

「俺はゴミの臭いは嫌いなんだよ」

感情の読めない表情はおよそガキらしくないが、アメデオの膝の中でちんまりおとなしくなっている様子とさっきの泣き方はこのままここに捨てて帰ろうかという選択肢を諦めるのに十分な威力を持っていた。それ以外に理由はない。哀れだからだ。おまけにスペロの人身売買の被害者というなら、現在スペロの上に位置するチェスカトロの構成員として、とりあえず、自警団的な意味で、責任は感じる。だから連れて帰る。

断じてこのガキがかわいいからとかそういうんじゃないねえ。

「——ひな」

「ヒナ？なにが？……………あ、この子の名前？なんでひな？」

「昔ヒサメ語の教本に出てきた」

そういうとアメデオはからから笑っていい名前じゃないか、と言った。

「名前が決まったよ、ひなだつてさ。よかったね、ひな」

ガキはアメデオに手を握られながらきょんとしている。

What should I do? (前書き)

未成年の飲酒はダメ絶対！

What should I do?

グラスを揺らすとボール状の氷がぐらぐらと音を立てる。氷を浸している液体は見てるだけで酔いそうなほど濃い色だ。だがこれくらいでなきゃやってられない。

謹慎処分を受けてすぐに仲間の何人かと共同生活していた家を出奔した。2ヶ月ほど監視がついたものの俺は14年の人生の中で一番に退屈な2ヶ月を過ごすよう努めたし、現住所もきちんと本部に届け出たから今はもう自由に動ける。

だが謹慎中の俺たちに仕事なんかあるはずないから、こうやってバカジョノにたむろって酒だの煙草だのをくらって時間をつぶしているわけだ。時々腕慣らしと銘うって組手するのが唯一の気晴らしだなんて最悪にもほどがある。

「あんまり呑むと身体壊すよ」

「このくらいでうるせえな」

隣に腰かけたルーカの無関心なたしなめを退けグラスをあおぐとやつと一緒にやってきたシャラが「かつくいー」と手を叩いた。絞められてもいないのに首が真っ赤になっているのを認めてため息をつく。

「酔ってんじゃねえかそいつ。俺を止める前にその女を寝かせろ」

「50シユテル」

「死ね」

ルーカの足元に座り込んだシャラがけたけた笑って「しね！」と唇をとがらせる。バカだろ。

「フーベルはどうだった」

「まあいい感じに荒れてたね。おかげで小金がぎつくごく。やっぱ
り軍政はいいねえ、腐敗しててつけいる隙がいっぱいあったよ」

「国境は」

「エメリア側は持ちこたえてるけどフーベル側が厳しいね。末端の
兵士が追剥に成り下がってる。おかげで入ってきた難民が強盗にな
りかねないってんでこっち側では十把一絡げに拘束されてるみたい
だ」

「ベルレアファミリーは動いてるのか？」

「ダメ。こっから先はお金とるよ」

舌打ちを隠す気も起きない。守銭奴が。

「50シュテル」

「150」

「70」

「145」

「…やっぱ死ね！」

ソファを蹴ってグラスを投げつけたがルーカはひらりとかわしてテ
ーブルの向こうへ逃げた。

「やれるものならやってごらん」

「待てこの…っ」

投げた灰皿もかわされ逆にフォークが飛んでくる。しゃがんだ先で
シアラが「ひゅーひゅー」と無責任に応援してくるのがよりいつそ
う耳障りでムカつく。

テーブルを蹴っ飛ばしルーカを追い詰めようとしたが逆に乗り上げ

上層部のいう通り謹慎していたってそれがいつ解除されるかなんざ分らない。ボスの不興をかって、ということなんだからその怒りを解かなきゃいけないわけだがこっちにはその心当たりがないのだからどうしようもない。謝りに行くだけでは門前払いどころか青あざ作って帰ってくることになるのはバカどもを見ていて学習済みである。

だがこのもどかしさは理解しているからといってどうにかなるようなものではないのだ。ボスの意向は理解している。俺たちに何を求めているのかも分かっているつもりだ。だがこっちが”謹慎”している間に周りの間抜けどもはどんどん株をあげて出世していく。

「くそ！」

むしゃくしゃする。巷では自分の存在価値が見出せないとかなんとかほざいて自殺するのが失業者の間で流行っているらしいがそんな連中の気持ちが分かるようになるなんて想像もしていなかった。存在価値なんか見出そうとしなけりゃ一生見出せないもんだろ！

What do you think?

アパートは一般人用のもので1LDKのユニットバスつきという一人暮らしするには十分なものだ。俺はチエスカト口に入ると同時に休学し寮を完全に出ている。実家に帰るつもりもないし、謹慎している以上ほかのファミリーとシェアするのも御免こうむる。だから部屋には一人で住んでいた。この前までは。

玄関のドアを開けたとたん目の前に座り込んでいる小さな生き物が目に入って、俺は目をつり上げた。

「おまえまた寝てなかったのか！」

すでに日付はまたいでいる。5歳（証言アメデオ）のガキが起きていていい時間ではないというくらいの常識くらいは持ち合わせていた。親父もお袋もマフィアにしてはそのへんきっちりしていた。

ひなはこっちを見上げるだけで動こうとしない。俺はため息と一緒にイラだった気分も吐き出すように努力した。ダメだ、一発でも殴ればこのちっぽけなガキはあっけなく死んでしまう。

ひなをここへ連れ帰ってもう2週間がたった。

初めてのころはホームレス生活のなごりでか廊下で排泄したり入浴を極端に嫌がったりしてたが、もともと賢いのか順応性が高いのか、今ではちゃんとトイレを活用できるし俺と一緒になら風呂にも入れる。スプーンも使えるようになった。

俺が外出してるあいだはテレビだのを見ておとなしくしているようだが、ただ先に寝ているという命令だけはどうあっても聞き入れたくないらしかった。

「つーか床に座るなって何回言えば分かるんだよ…また洗わなきゃいけないだろ」

当然俺は土足だが、ひなは靴を持ってないから寝る前に必ず足だけは洗わせたい。一昨日までは包帯を巻いていたのでそれを取りかえるだけで済んだのだが、もう傷口のもふさがったのと毎日とりかえるのが面倒になったのが理由で外してしまったのだ。

しかしひなはどこでも座るし寝転がるしで、結局また頭から洗うはめになることも少なくない。というか一昨日と昨日はそうだった。本当に手間のかかるガキである。

かといってまた捨てるわけにもいかない。アメデオに何言われるか分かったもんじゃねえ。

「飯は食ったのか？」

後ろをアヒルみたいにくつついてくる様子はたぶん可愛いんだろう。だが俺は可愛いものを愛でる趣味を持っていないので、そういうひなを見ても、だから？という気持ちにしかない。

質問はしたもののコイツは何を訊いても首をかしげる以外の動作をしないのでそのままリビングに入った。テーブルにのせておいたサンドウィッチがきれいになくなっていることに満足してひなを風呂へ追いやる。

バスルームに行けと言えば行くし服を着ると言えば着る。言葉が分からないわけではなくしゃべれないのだ、ということはこの2週間で了解した。

「服は脱いでから入れよ」

初めのころよりはいくらかマシにはなったが、ひなはまだガリガリに痩せていて健康的とはいえない。腕の骨折も治らないし、おまけにびっくりするほど小さいから俺は何かの拍子に踏み潰してしまわないように気をつかわなけりやならなかった。

俺のいない間に寝転がってたかもしれないので今日も頭から洗い上げて、相変わらず冗談みたいに軽いひなを抱えベッドに下ろす。

ひなの髪はすぐ絡まってしまうので乾かすのも一苦労だ。俺の髪は金髪だし直毛だしこんなに柔らかくもない。自分の髪を乾かすのとは勝手が違って少してまどう。

悪戦苦闘しているうちにひなの目が伏せがちになる。そうになればオチるまではすぐだ。力の抜けた体を胸というか腹のあたりで支えながら髪の水気をぬぐっていく。だから寝てるというのに何を頑固になってるんだか。

ひなの髪が完全に乾いたのを確認してから普段着のシャツ（俺の）を脱がせ、パジャマのＴシャツ（やっぱり俺の）を着せベッドに寝かせてやる。これでようやくガキのお守りが終わるのだ。

かぶったタオルで自分の髪もふいて横に寝転がる。酒は充分飲んできたし、今からじゃテレビも大したことはやってない。もう面倒だからタオルの洗濯も明日でいいだろ。

すぐ横にあるひなの鼻がすびよすびよ音をたてて動いているのを見てハムスターを思い出した。このぺたんこの鼻。小つちえ口。

「……………」

眠ってるひなに指を握りしめられる。

そのまま、ハムスターを最後にみたのは実験室のケージの中だったことに思い至り目をつむった。命なんて所詮は運にすぎないのだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4822q/>

Love me, Kitty!!

2011年2月19日12時04分発行